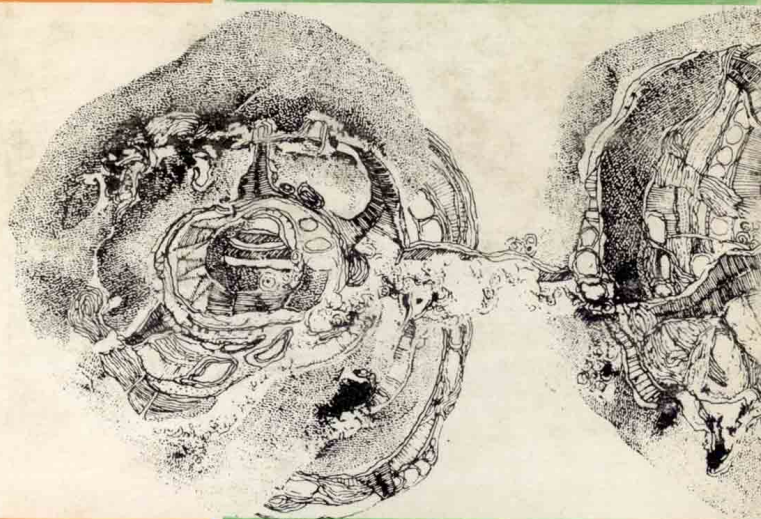


岡田孝一エッセイ集

地方での根拠地づくり

文学・可能性への展望



### 著者略歴

1927年6月、名古屋に生まれる。1946年、朝日新聞中部本社に入り、労組の青年部長、分会書記長として労働運動に参加する。1950年、朝鮮戦争下のレッドパージで同社退職後は、全印総連愛知地連執行委員となり、印刷労働者の組織化に盡力する。現在は印刷写植業を自営。1950年より68年に脱会するまで、新日本文学会員。その間、「作家」同人、「バルチザン通信」主宰、「幻野」編集同人などを経て、活動家集団思想運動芸術部会会員。数編の小説を書いたほかは、主として文学批評の分野で仕事を。共著に「研究中野重治」（神無書房）がある。  
住所 名古屋市昭和区長戸町4-20

### 文学・可能性への展望——地方での根拠地 づくり

---

|     |                                                                         |
|-----|-------------------------------------------------------------------------|
| 発行  | 1977年11月15日発行                                                           |
| 著者  | 岡田 孝一（おかだ・こういち）                                                         |
| 発行者 | 武内辰郎                                                                    |
| 発行所 | (株)オリジン出版センター<br>東京都新宿区神楽坂5-61<br>電話03-269-0481・260-0453<br>振替東京0-44705 |
| 印刷  | 旭印刷株式会社                                                                 |
| 装幀  | 堀 正明                                                                    |
| 定価  | 1500円                                                                   |

---

落丁本・乱丁本はお取替します。

岡田孝一エッセイ集

文学・可能性への展望



文学・可能性への展望・目次

## 1 文学・可能性への展望

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 文学・可能性への展望——地方での根拠地づくり…………… | 8  |
| 朝鮮戦争下の宮本百合子祭……………           | 20 |
| 口車にのった話——文学の自律性を考える……………    | 36 |
| 初心忘るべからず——私の戦後史の試み……………     | 48 |
| 付記・文芸時評三編……………              | 59 |

## 2 当り前のことをむきになつて

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 当り前のことをむきになつて——杉浦明平「赤羽根村の一日」について…………… | 78 |
| 民族のうめき声——金達寿「玄海灘」に描かれた二つの恋愛……………      | 87 |
| 感想・意見とりまぜて——似非共産主義文学者の退廃……………         | 94 |

|                                        |     |
|----------------------------------------|-----|
| 文学運動における党派性——「新日本文学会の再検討」論によせて……………    | 104 |
| 彼との対話——新日本文学会第十一回大会のことなど……………          | 110 |
| 沈黙者の意志——新日本文学会第十一回大会を終えて……………          | 118 |
| 余燼さめやらず・1——小林勝の突然の死に寄せる……………           | 121 |
| 余燼さめやらず・2——小林勝「断層地帯」を中心に……………          | 134 |
| 吉田欣一詩集「わが射程」について——労働体験に培われた詩的イメージ…………… | 146 |
| 差別語の問題と文学者の姿勢……………                     | 157 |

### 3 パルチザンの眼

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| パルチザンの眼——「パルチザン通信」のことなど…………… | 172 |
| 「これは世直しだわさ」——「伊勢湾台風」体験記…………… | 186 |
| 近況思いつくまま——雑談風に……………          | 192 |

|               |     |
|---------------|-----|
| 近事雜片——雪降る日の感傷 | 201 |
|---------------|-----|

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 目くじらたてること——生活の中で考える | 208 |
|---------------------|-----|

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 雜感ひとまとめ——雨降りつぐ七月の記 | 221 |
|--------------------|-----|

## 4 運動者の視点

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| 中学生の指紋採取・1——反対運動の個人的中間報告 | 240 |
|--------------------------|-----|

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 中学生の指紋採取・2——教育・人権問題としての側面 | 263 |
|---------------------------|-----|

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 自治体首長選挙と革新共闘——愛知県知事選における問題点 | 275 |
|-----------------------------|-----|

|    |     |
|----|-----|
| 後記 | 291 |
|----|-----|



1

文学・可能性への展望

## 文学・可能性への展望

### 地方での根拠地づくり

今年の一月二十一日は、宮本百合子の没後二十五年になるということで、記念の集会が準備されたり、特集を組んでいる雑誌もいくつかあるようだ。ある文学者の没後なん年かを、ただそれだけの理由で記念することにもあまり意義を感じられないし、ましてやそれが一政治党派の意図的なカンパニアに利用されるようなことがあるとすれば、むしろその文学者に対する冒瀆なのではないかと、苦々しい思いがつのってくる。昨年の十月十九日は中国の文学者、魯迅の没後三十九年の日にあたったので、私たちはこの日における私たち自身の生き方とかかわらせるなかで、魯迅の作品を深く知る糸口でもつかみたいと思い、魯迅に関する講演と討論の会を開いたのだが、思いがけず多くの人たちの関心と支持を得て、会そのものも盛会であり、参加者も終始熱心に、積極的な発言を続けたことに驚いたことがある。私自身がこういう会を開くことに中心的な立場で行動しておきながら、他のところで計画している集会やカンパニアに、とやかく批判がましいことを言うのも気がひけるが、宮本百合子の記念集会や特集の場合でも、また今年没後四十年となる魯迅

の業績を、機関紙の上で大きくとりあげているある政治党派の場合についても、それはそれで必要なことであるのかも知れないが、しかしこういうやり方が文学者として、人間として真摯に生きた人を本当に記念することになるのであろうか、むしろ文学とは無縁のところにある別の存在にまつりあげてしまうことになるのではないかとする危惧がどうしても強まってくる。文学者にとつて、その人が記念されるということは、その残した作品についての徹底的な研究、批判を通してしかないであろうというのが私の考えだからである。

ところで、そうした私の考え方からしても、『新日本文学』がその誌上で、百合子没後二十五年のことはともかく、宮本百合子の果した文学上の仕事について、最近ではほとんど言つてよい位にとりあげてこなかったことにも、いささか不自然なものを感じるのだが、どんなものであろうか。現在は新日本文学会を離れている私が、このようなことを言う資格はないかも知れないが、共産党との間のいざこざをゴシップ風にならべたてた中村智子の文章が、『新日本文学』一九七五年三月号に掲載されたことがあり、これはただちに中野重治が次号の「緊急順不同」のなかで批判を加えたものの、ああいう論議がのることが宮本百合子の文学に対する検証が行われたことにならないのはもちろんのことである。この場合、中村智子は彼女が書いた宮本百合子の伝記について、共産党との間におこったトラブルを、『新日本文学』にぶちまけたにすぎないことで、はじめから宮本百合子とその作品を文学論の対象として考えてはいなかったわけで、これを評論としてとりあげた編集部に勇み足があったと思われる。ただ私は中村が「宮本百合子は共産党の独占物ではなく、日本の近代文学および抵抗の歴史のなかの大きな存在である」と書いていることには全く同感する。

たとえば小林多喜二、宮本百合子といった文学者とその作品を、ある政治党派がまるで自己の占有物かのように扱い、作品の出版からその解説に至るまで、自己の党派の恣意的な意見を押し通そうとすることが、本来広範な人民大衆の共有財産として、そのすぐれた仕事に学び、また彼等が果せなかった仕事、あるいは弱点などについて検討し、それをのりこえて進んで行こうとする努力を、はつきり言えば妨害していることに対する私たちの反撃が極めて弱いし、新日本文学会などの活動のなかで当然このことに眼をくばられてしかるべきではないかと思う。小林多喜二、宮本百合子の古くからの僚友であり、その文学の良き理解者である中野重治はこのことをどう考えているのか私の知りたいところである。中野には「小林多喜二と宮本百合子」（講談社）に収められた諸論文があるけれども、最近の中野重治の発言のなかには、『文芸』一九七五年十月号の、秋山清、伊藤信吉、小野十三郎との座談会での言葉からもうかがわれるように、自らがその指導者の一人であった戦前のプロレタリア文学運動について、もう一度批判的にとらえかえそうとする考え方が強いと思われる。これについては私自身も、中野重治の「甲乙丙丁」を批評した文章のなかで、次のように書いたことがある。

△この問題、つまり作品からはなれて言えば、小林多喜二を国家権力、直接には警察が拷問によって殺したことを許すことはできないが、そしてまた当時の運動に参加した文学者たちの転向も、それ自体彼等自身の弱さなのであって、運動のあり方が転向の口実につかわれるようなことは許されるべきものではないが、しかしそのことによって当時のプロレタリア文学運動の方針、ひいては大衆運動であったプロレタリア文学運動とその構成団体に対する共産党の指導に対して、きびしい批

判的検討をさし控えたり、的確な判断を疊らせたりしてはならないであろう。中野にしても私たちにしてもこのことはプロレタリア文学運動の批判的再検討、あるいは伝統の批判的継承という観点から深く考えなければならぬ課題なのである。

中野重治が一九五四年一月から七月にかけて書いた長編小説「むらぎも」のなかでも、革命運動の内外にわたるさまざまな現象や、人間のもつあらゆる側面を、積極的に生かして行こうとする姿勢が見うけられ、戦前の運動が、むしろそういうものを一つ一つ切り捨ててしまい、つぶしてきたのではないか、もつと他にやり方があったのではないかとする自省の思いが、「むらぎも」という作品全体のなかに流れていたように思う。こうした考え方は「甲乙丙丁」のなかにも引きつがれながら、ここでは「むらぎも」の場合とはまたことなつた微妙な変化、もう少し強い批判的な立場がくみとられるのであるが、いずれにしても中野たちが中心となつて進めてきた文学運動をも、批判的にとらえかえそうとする立場には変りないように思う。とすればその運動を代表するほどの積極的な作品をのこして、国家権力の手でたおれた小林多喜二の業績に対する今日の評価も、また厳密に行われる必要があるはずである。戦後まもなく平野謙、荒正人との間に行われた「政治と文学」論争のときの、小林多喜二評価とはまたちがった、地についた小林多喜二に関する発言を、中野から聞きたいものである▽

これは宮本百合子の文学に対しても同じことが言える。そういうものを手がかりに、戦前、戦後をつなぐ文学運動の批判的再検討を試みる役割が、新日本文学会にこそ課せられていると思うのだが、これは私の会に対する過大評価にすぎないのであろうか。

地方における文学運動の歴史と現状を報告するつもりで書きはじめたのだが、思わぬところへ筆が走ってしまった。私のなかに新日本文学会が昨年十二月三十日で、会創立三十年を迎えたということの思いと、宮本百合子の没後二十五年ということが、どうしても重なってくる。考えてみれば宮本百合子が新日本文学会の活動にかかわった期間は、わずか五年であつた。あの「歌声よこれ」とたからかに進歩的文学運動の胎動を促して以来の、宮本百合子の意欲的な仕事は、新日本文学会の創立からその活動と切りはなしては考えられない。そしてこれに重なる私自身の新日本文学会とのかかわりをふり返つてみても、キザな言い方をすれば一九五〇年に入会して以来、名古屋を中心に地方で細々とながら文学運動をつづけてきた私にとって、新日本文学会は私の青春と共にあつたし、愛知支部が存在したころは、これが私にとって唯一の文学の拠点であり、地方における文学運動の根拠地であつたのである。

さきごろ必要があつて、古い『新日本文学』を調べたところ、一九五一年七月号に、東京で開かれた五月二十三日の宮本百合子追悼記念祭の記事とならんで、六月三日に名古屋で開いた百合子追悼集会の報告を「名古屋の百合子記念祭」という題で私が書いているのに気がついた。このときには東京においても、また私たちが計画した名古屋の集会においても、共産党の名による悪質にして執拗な妨害が行われたことは、いまでも記憶に生々しいところであるし、関係したものの一としてこのことを証言しておきたい。宮本百合子に対する道理を無視した悪意ある中傷、その作品に対する文学批評からはなはだしく逸脱した誹謗が、共産党などの指導のもとに、雑誌『人民文学』その他で組織的に行われたことも明らかにしておきたい。現在、共産党の関係者はこれを当時の党の一

部にあった誤まった傾向のやったことで、党自体は関係ないし、しかもそうした傾向はその後批判され、克服したと称してすましていくが、このことによって苦しみ傷ついてきた人間にとっては、いまになっても少しも克服されていることではない。地方の場合などは特に、明らかに党内部の多数派によって指導された地方組織により、共産党の名によって妨害されたことであり、決して党の一部の傾向と言えるものではなかったし、当時党の指導に忠実に従った党員文学者は、それが党であつたからこそ、党という名の権威に屈伏して誤まったのである。名古屋での場合、最初に計画したときの新日本文学会員のほとんどが、準備会に出てこなくなり（これはのちに党の干渉、圧力があつたことが判明する）愛知県学連の委員長であつた伊藤元雄ら学生諸君との共同の催しとして、成功させることができた。伊藤元雄のことについては、『武井昭夫批評集』第二卷（未来社）の折り込み月報に、小林祥一郎が書いてるので、参照していただけると有難い。

この一九五〇年代における宮本百合子をめぐる問題をはじめ、新日本文学会の運動内部における共産党との関係については、秋山清が『文学の自己批判』（太平出版社）のなかで、詳細にしかも極めてすぐれた考察を行なっているし、その後の問題については、前記の『武井昭夫批評集』第一卷、第二卷の自注として、武井昭夫が書いていることが、重要な問題にふれていると思うので、たとえ現在の立場が新日本文学会と離れている人たちの意見であるとしても、新日本文学会三十年史が編まれるときには、是非こういう意見を組み入れてほしいと希望しておく。

戦後はじめて愛知県に新日本文学会の支部をつくつたのは、浅野紀美夫、丸山静、原田肇の三名

であり、その後職場の文学サークルや地域の同人誌グループとも結びついて、会員も三十名をこえ、積極的な活動をつづけたのに、この直後に共産党の五〇年問題と称せられる内部抗争がおこり、文学運動のなかでも『人民文学』グループとの対立があつて、支部は解散状態におち入ってしまった。私が職場での文学サークルの活動は別として、東海地方における文学運動に、本当に自分の責任でかわつて行つたのは、この宮本百合子追悼記念祭が最初のことであり、これが出発点だと言うことができる。このあと岐阜支部で頑張つていた吉田欣一の要請やら援助があつて、愛知支部の再建に取り組むことになる。名古屋大学文学部教授として京都から移住してきた新村猛を支部責任者として、杉浦明平、丸山静らを中心に、一九五三年三月、愛知支部再建にこぎつけるまでには、いろいろの苦闘の曲折があつたが、それを書くのが目的ではないから省くことにする。石黒英男（当時名大文学部在学中）、小林祥一郎（名大経済学部在学中）、岩田光弘らが支部再建のための手足となつて活動し、いま全通ルポ集団で活躍している金子史朗もこのころ会員となつてゐる。また支部結成に至るまでに、当時名大法学部教授として単身名古屋に在住していた信夫澄子の夫人で、歌人の信夫澄子の尽力が大きく、支部結成大会には会を代表して信夫澄子が出席したことを記しておく。一九五四年一月三十一日、岐阜で中野重治、丸山静の講演会があり、翌日の二月一日夜、名古屋で中野重治をかこむ懇談会があつた。このとき同人雑誌『作家』を主宰している小谷剛が中野を訪ねてきて、これを機会に小谷剛は新日本文学会に入会することになる。岐阜も名古屋も大雪の降りつもつた日であつた。

その後、一九五七年十月の新日本文学会第八回大会の過程で、文学者がただ同じ地方に住んでい



るといふ理由だけで結びついてゐるのは間違いだとする意見などもあり、支部解散の方向が打ち出されて、愛知支部も解散することになった。創造活動をめざす上には、あくまでも文学の主張なり方法なりを軸とした流派としての結びつきが大切だという考え方も判らないではないが、これが新日本文学会の組織としての力を弱めたこともいふまでもない事実であろう。新日本文学会の方針に基づき、そこで文学創造の仕事を進めようとする、大きな意味での共通の目標に結ばれている会員が、地方で支部をつくることは自然の成行であり、むしろ積極的に進めてもよいことだと思ふのだが、どのような弊害があったか知らないが、あのときの支部解散論には地方在住者としていまも疑問がのこるところである。支部結成から解散までわずか四年ほどの期間であつたが、この間に『新日本文学』を毎月百部前後は取扱ひ、機関紙『愛知文学』の発行や、読者会も続けてきた。アメリカ軍の小牧航空基地拡張反対運動に全力をあげ、文集『小牧基地』を発行したのもこの間の支部の仕事であつた。支部解散後、文学的主張や流派による結びつきをはかるという方針も、中央でのことは別として地方在住の会員には困難なことであり、それまでのエネルギーも方向を見失つて、結局一人一人が個人の仕事のなかにとじこもる結果になつて行つた。

それでも一九六〇年の安保反対闘争以後になると、磯貝治良らの若い文学グループの活躍が目立つようになり、彼等と私たちとの交流もはじまつた。この地方のいくつかの文学グループ、個人が結集し、永い間の準備活動をかけて計画したのが、「一九六二年秋・文学がよびおこすもの」という集会であつた。表面的には東京から花田清輝、武井昭夫、関根弘を招き、地元の杉浦明平、丸山静を加えて講演とシンポジウムの会を開いたという形であるが、集会の準備活動そのものがさま